

石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成 25 年 9 月 30 日発行 第 27 号

客船ぱしふいっくびいなす石巻港へ

「ずんだもち！」

これはもちろん、枝豆を使った仙台名物の餅ですが、伊達武将隊がお客さんとの記念撮影の際に使う決まり文句でもあります。武将隊の皆さんが声を合わせてこれを叫ぶと、仙台名物の PR になります。また、それ以上に、お客様を笑顔にできる、楽しいアイデアです。

去る 9 月 10 日（水）、客船ぱしふいっくびいなすが石巻港へ入港しました。朝 7 時の到着予定でしたが、実際には 30 分近く早めに船が姿を現したため、岸壁で待っていた私たちも大慌てで歓迎のために振る大漁旗を取りに走りました。客船のお客様が港で期待しているのは、まず、歓迎の気持ちと姿勢だと思います。

この日、市は歓迎のための新戦力を投入していました。伊達武将隊です。隊の皆さんは、武将の衣装でお客様と交流するプロ集団です。式典でのパフォーマンスを終えると、私たちのテントにもやってきました。

ちょうど私たちのテントは支倉常長の就航 400 年を祝う展示をしていたため、とくに一行の興味を引いたようでした。支倉役の役者が「なんと、わしのことが書いてあるではないか」など、芝居がかった反応を見せてくれました。その声と衣装に釣られて、お客様が集まり、次々に写真に収まっていました。存在感大です。

私も、細面の若い伊達政宗と話をしました。「石巻は伊達正宗の家臣の川村孫兵衛が北上川の治水を行い、穀倉地帯としたため、孫兵衛が恩人とされています」と言うと、政宗はさすがに歴史に詳しく、「仙台にもな、孫兵衛がつくった、四ツ谷用水という水路があつてな、その跡はもうほとんど残っていないんじゃないじゃが…」と説明してくれました。地域ならではの歴史の話を期待するお客様への対応にふさわしい若武者です。

この日、石巻専修大学は 3 つのテントで、私たちなりのおもてなしをさせていただきました。主に、サバだしやきそばの無料提供と、東日本大震災後の石巻の被災と復興の写真展、そして支倉常長関連の展示でした。やきそばと写真展は庄子真岐准教授とそのゼミ学生が担当

し、清水義春特任教授が震災語り部と展示場づくりの指導をしてくれました。

昨年度から客船の歓迎をしてきましたが、こ

れまでは震災復興が展示の中心でした。武将隊登場とともに普通の観光らしくなった感じでした。今年は、展示物に、理工学部の高橋智准教授と経営学部の益満環准教授のゼミ学生

が作成した江戸時代のからくり「板がえし」利用のサン・ファン・パウティスタ号オブジェが加わりました（左下写真）。また、「工房かざみどり」の鶯出孝子さんの協力を得て、シャドーボックスの体験コーナーを設置しました。写真の無料撮影と印刷のサービスもしました。

シャドーボックス体験は、題材が支倉常長像となっており、製作に約 30 分はかかりますが、それでも 7 名はご自分の作品を完成させていきました。屋外という環境を考えると、意外に多くの方がこの手先を使う楽しみにチャレンジしてくださったと言うべきかもしれません。

テントに立ち寄るお客様との会話から、豪華客船に乗る方の傾向がわかってきました。オプション・ツアーに参加する人たちはそれなりに出発時間に追われるようですが、岸壁のお客様はあまり時間を気にせず、マイペースで楽しんでいらっしやるように見えました。

この客船は 10 階建てのビルくらいもあり、中にはカラオケ・ルームやマージャン・ルームも設置されています。が、あるお客さんによると、あまり使われていないそうです。パソコンや携帯電話も船内ではあまり使われていないそうです。逆に、社交ダンスは結構人気だそうです。皆さん、優雅な船旅がお好みなのでしょう。

客船にはステージがあり、登壇するのは、相当な有名人です。今回の船旅には、漫才の「おぼん・こぼん」が登場したそうです。40 分の予定だったのが、実際には 1 時間を超える熱演だったとのこと。こんなことは通常の演芸場でもテレビでも許されない、客船ならではの出来事だと思います。演じる側も見る側も、時間を忘れられる環境ゆえのぜいたくです。

岸壁で御客様を迎える私たちも、ぜいたくな時間づくりのお手伝いを心掛けています。もちろん観光ですから、みなさん非日常的なものの、石巻ならではのものの、という範囲です。サバだしやきそば、石巻写真展、支倉常長とサン・ファン・パウティスタ号などがその結果です。

今のところ、おもてなしを企画できるのは人間だけです。迎える人の準備と心がけで港の印象は大きく変わります。伊達武将隊の皆さんは、夏の暑い中でも冬の寒い中でも鎧兜に身を包み、お客様を迎えるそうです。この姿勢は、我々も見習わねばならないことです。

夕方、出港時刻となると、汽笛が鳴り、船が岸壁を離れ、花火が上がります。初対面の乗船客の皆さんとの別れなのに、胸に迫るものがありました。これは、客船という舞台装置のなせる魔法のようなものなのでしょう。乗船客の皆様もきっと、同じ思いで石巻を後にしてくださったものと想像しています。石巻がより心に残る港となるように、皆さんが時の流れを忘れるような企画を目指し、工夫を凝らしたいと考えています。

（丸岡泰）



支倉常長の航海

私たちは、8月6日から8日の仙台七夕まつりに参加しました。そこでは、支倉常長の航海に関する展示を行いました。今年は支倉が出帆してちょうど400年の節目なので、その航海を紹介しました。

1613年10月28日、常長は宮城県石巻市の月の浦から航海に出ました。仙台藩藩主伊達政宗の命によりサン・ファン・パウティスタ号というスペイン式の大型のガレオン船で約180名の使節団はメキシコ、スペインを経由しローマに向かいました。この船は推定約500トンで長さ505メートル幅11メートルとされています。この航海の目的は、諸説ありますが仙台にキリシタンの司教座を置くためという説や、外国の鉱山技術と造船技術を得るため、通商のためなどの説があります。

今のメキシコのアカプルコに着いた支倉使節団は、盛大な歓迎をされました。メキシコでは、日本人のうち78名が洗礼を受けました。その後常長は、ヨーロッパへ向かう人数を30名ほどに絞り、多くの日本人を残しメキシコを出ました。この時スペイン本国まで400キロの距離がありました。支倉常長達は日本人で初めての大西洋横断を成し遂げました。

ヨーロッパで支倉使節団一行はスペインのコリア・デル・リオという町に到着しました。ここでは同行した日本人数名が日本（ハボン）と名前を変えてここに残ったという説があります。さらに使節団は、セビリヤの町に行き、ここで交易と宣教師を求めて活動を行いました。

そうしてやっと使節団が首都のマドリッドについては1614年12月20日、それから翌年1月30日に常長は国王のフェリペ3世に謁見しました。

1615年2月17日、常長は、聖フランシスコ会尼僧院で洗礼の日を迎えました。洗礼名は、ドン・フィリッポ・ファシクラとつけられました。その名前はスペイン国王と聖フランシスコの名前を二つ重ねたとても名誉のある名前でした。

1615年10月20日、使節団一行はローマに到着しました。11月3日には常長達は、バチカン宮殿でローマ法王パウロ5世に謁見政宗からの親書を渡しました。使節団は、その後1616年1月7日にローマを出発しました。月の浦を出たとき約140人いた日本人の数はコリア・デル・リオに着いた時には24人になり、ローマでは21人そしてここでは15人に減りました。復路はメキシコとマニラを経由して1620年9月22日に常長は7年の年月を経て仙台に帰りました。

この航海は、外交としての成果をあげることが出来ませんでした。しかし、これにより世界に日本を知らせることとなりました。常長は、新しい歴史を刻むという偉業を成し遂げたのです。



石巻がサン・ファン・パウティスタ号の出帆地であり、今年が400年めであることへの認知度は、仙台の街を歩く人々の間で高くないと感じました。まだまだPRが必要です。
(横山風太)



カラクリ常長、七夕へ

8月6日からの3日間、仙台で開かれた七夕祭りで、私たちは「石巻復興応援ブース」の展示運営を行いました。私は、支倉常長のカラクリ人形の頭部製作を担当する事となりました。

人形を設計するにあたって、カラクリ人形を1から設計して製作するには特別な知識が必要で難しかったため、私たちは自力での製作を避けました。市販されているカラクリ人形のキットを改造し、外見を常長に仕立てる計画を立てました。

人形の頭部の製作にかかると、頭部はカラクリが動くためのギミックの一つとなっているので、頭部の重量はできるだけ軽くする必要があることがわかりました。その素材選びに手間取りました。私は紙粘土を素材にし、その中でも最も軽いものを選びました。常長像という説のあるローマに残されている洋画と仙台に残されている国宝の肖像画の写真を参考にして、頭部の製作を進めました。

このカラクリ人形はゼンマイを巻き、手の上に乘せた皿の上に重りを置く事で前に進み、しばらくするとUターンし戻ってくる仕組みです。この動きにより、スペインとローマへ行き、国王と法王に主君の伊達政宗の書状を渡し、再び日本へ戻ってくる常長を表現したつもりです。まもなく頭部は無事完成し、人形を七夕祭りに出すことができました。

お祭り当日は夏休みであったため多くの子供連れの方がいました、私は完成した人形を通して多くの人と会話する機会ができ、多くの人の七夕についての考えや復興についての考えを聞くことができました。人形がコミュニケーションのきっかけにもなりました。

カラクリはとくに子供たちには好評で、足を止めて見てもらえました。予想通り、子供たちは動くおもちゃが大好きです。夏休み中の子供たちの思い出の1ページになったと実感しました。また、子供たちとともに家族の皆さんも足を止めるため、結構たくさんのお客様が小さな人形の動きを見守ることになりました。人を集める上でも、この人形の効果は大きかったと思います。

常長のカラクリ人形の頭部を製作したことで、今回の七夕祭りの成功にも一役買ったと思います。同時に、私たちも支倉について学ぶ良い機会となりました。

(吉城翔太郎)